

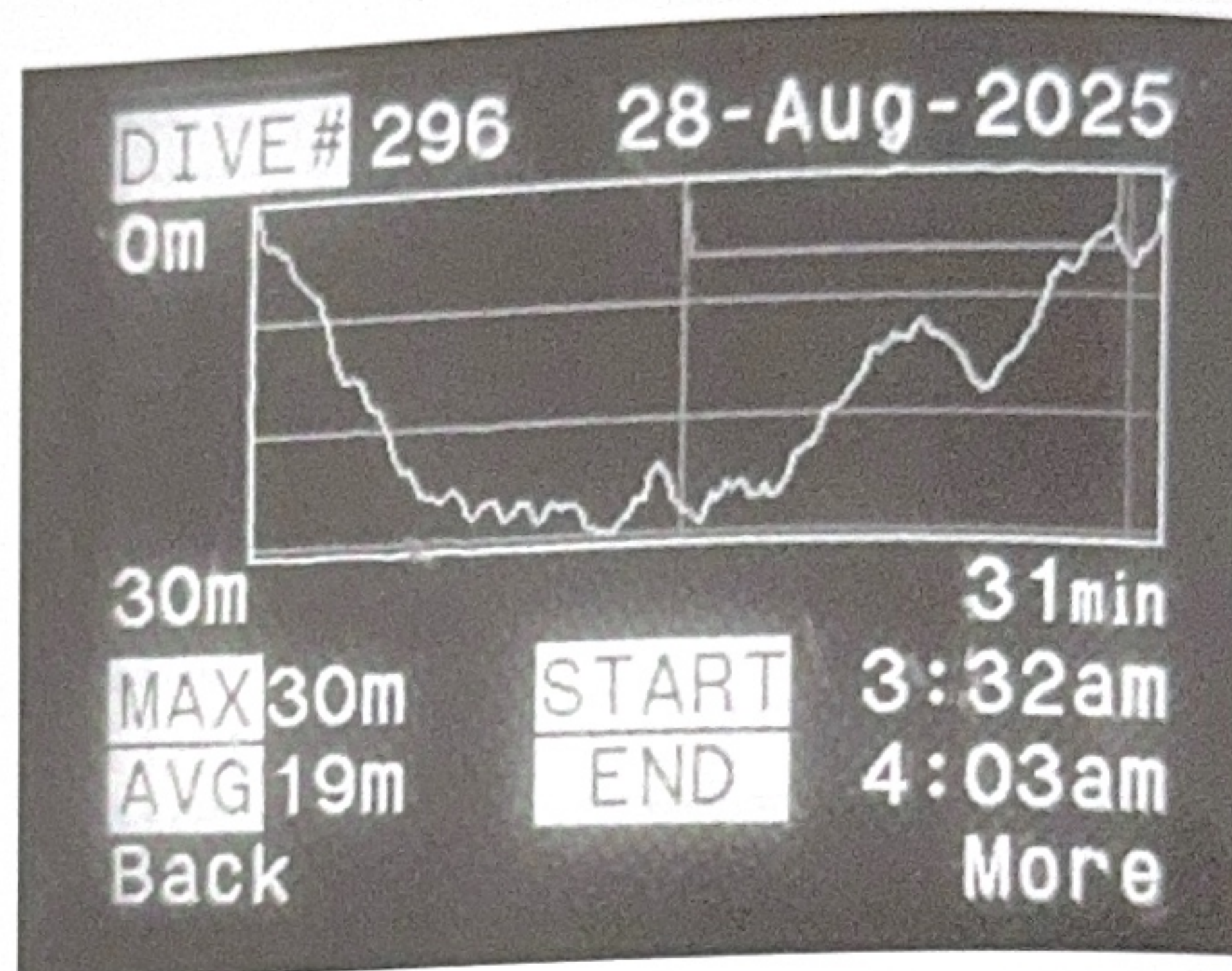
## 業務中の減圧症発生から治療、 そしてこれから

中川 隆

有限会社 河童隊

河童隊の中川 隆は、大学卒業後(株)日本スキューバ潜水に入社。6年ほど水中作業をメインに各種業務を経験。そのころ覚えた技術は今でも使え、暗いところや洞窟、汚いところ、流れの速い場所も平気である。その後(株)スガ・マリンメカニクに入社。生物調査を中心に業務をやっていたが、テレビ朝日「ニュースステーション」で、代表の須賀次郎氏のアシスタント、須賀氏が番組を引退してからはメインカメラマンになる。最近は陸上撮影も行っており、NHKで「ホッケ柱」の映像紹介や、日本テレビの「ダッシュ海岸」等の撮影を行っている。さて減圧症罹患の話であるが、「減圧症に罹患した人の生の声を聴きたい」とのことから、この講演でお話することとなった。本編は会場でお話するが、以下が減圧症の罹患から現在までのアウトラインである。

2025年8月27日、鳥根県日御碕で潜水。午前中15m、十分な休息時間を置き、午後30mの潜水を行う。2回とも無減圧潜水の範囲内で浮上開始、地形に沿って徐々に浮上。デコストップなしを確認後、5分の安全停止を行い浮上。タンクを背負ったまま梯子を使って船に上がったが、船上で急に胸の胸骨が熱く感じた。こんな感覚は初めてだった。その後背中が痛くなったが10分後には痛みは消失。浮上後20分位に下半身から力が抜けて椅子から立てなくなり、つま先もかかとも上がらない状態となる。10分ほど酸素を吸引し一時回復、下半身の脱力感はあるも自力歩行できるようになった。その後、日御碕ダイビングセンターからホテルに移動中に両足の太ももの感覚異常を感じ、減圧症治療のできる鳥取大学病院に連絡。その時点では症状が酷くはなく、鳥取大学病院のアドバイスで近くの鳥根大学病院に独歩で受診。



鳥根大学病院では医師が多忙なようで、酸素無しで1時間以上待機中に症状が重篤化。自力排尿できない状態となり、歩行も困難となり車椅子で移動する状態となる。そのため、3時間ほど離れた米子の鳥取大学病院までタクシー移動となる。鳥根大学の5時間が悔やまれる。鳥根大学から鳥取大学への移動中は、数分置きに尻の筋肉が軽いけいれんを繰り返していた。「万が一意識不明になったら近くの病院には行かずに、鳥取大学まで直行してください。」とタクシーの運転手に頼み、心理的不安の中で長い移動となった。

タクシー移動中に日は変わり、翌8月28日の午前2時に鳥取大学属病院に到着。検査後、午前5時から高圧酸素治療装置に収容され、8時間の治療が実施され、その後5時間ずつ、計7回の治療で、なんとか歩行出来るほどまで回復したものの自力排尿はできず。排便はおむつ着用であったが下剤にて毎日順調であった。9月6日に鳥取大学病院を退院し、下剤・導尿・付き添いの状態で9月7日に東京に戻った。移動は飛行機に乗れないので、岡山経由、新幹線にて戻り、大泉から自宅はタクシーという状態で帰宅した。高圧酸素治療中は装置内が広かつ

たので、掴まり立ちし、ストレッチや様々なステップを踏む軽い運動を行うことが出来たのは良かったと思う。

9月8日から蒲田の牧田総合病院に入院し、損傷した神経の回復のため、高圧酸素療法とリハビリを繰り返す。歩行は改善が見られたが、自力排尿までには回復せず、自己導尿出来るようにトレーニングを行い9月17日退院。この後は投薬、自宅での排尿訓練を行った。9月21日ごろから徐々に排尿できるようになった。足腰も毎日のトレーニングで、徐々に回復してきている。牧田総合病院を退院するころは1日7,000歩ほど歩行していた。

現在症状はほぼ変わらず。皮膚の感覚異常、膝のこわばり、平衡感覚も悪いままだが、排泄関係は薬物療法を続けることで回復している。

毎日運動を続けることで感覚は不自由ながらもほぼ常人と同じ生活をする事が可能になった。排尿については、時々、出づらくなり何回もトイレに行くこともあり、少し前までは頻尿状態で夜中に2時間ほどでトイレに通ったりした。尿意がきつくて我慢するのが大変な時期もあったが、最近は落ち着いている。運動は結構ハードな運動をしているが、転んだことは1度もない。この先は、高齢なので無理はしないが、潜水現場に復帰を考えている。自分と同じ脊髄系の減圧症で牧田総合病院の土居先生の所に通っている竹内くんの経験も参考にし、土居先生のアドバイスに従って業務に復帰できれば良いと思う。土居先生には、色々とお世話になります。

